



朝鮮通信使の来日(11)

『第十一回・明和元年(一七六四)通信使』

航海

斎藤弘征

宝暦十三年(一七六三)十月六日、第十代將軍徳川家治の襲職を祝賀する朝鮮通信使一行四七七名は、釜山から海を渡り佐須奈浦に入りました。この時も波濤は頗る激しく、またしても二艘の船の柁が折れてしまいました。佐須奈では対馬の地図と、印刷した日本の地図を手に入れて、使員に模写させています。以後、一行は大浦湾・西泊・琴に寄港し同月二十七日府中に着きました。

府中

府中では、浦口で島(藩)主、以町庵僧の出迎えを受けました。島主義暢は二十三歳、島主の乗った船は長さ十余尋の彩船、装飾の仕方が精巧で彩色は燦爛としており、一隻の制作費は千金を要する、と正使趙職は観察しています。使臣は国書を奉じて西山寺に入りましたが、道の左右で見物する人の数は万名、とも述べています。西山寺は部屋が重なり、壁が重なって数百間にもなっている一行の員役達を皆収容できる程でした。また港の様子を、「多くの船が港に満ち満ちており、漁火が朝まで点いていて一島の都会地というべきである」とも述べています。イカ釣りの漁火でしょうか。

使臣たちは西山寺に十一月十二日まで滞在して吉岐に向かいましたが、この使行は何かと事件・事故の多い使行となりました。

崔天宗殺害事件

今次の通信使来聘では、過去最大の凶悪事件が起きました。日朝双方の典型的な文化摩擦による傷ましい殺人事件が起きたのです。宝暦十四年二月二十

七日(六月から明和と改元)、江戸城で聘礼儀式を終えた通信使一行は、帰路四月五日、大坂西本願寺津村別院の宿舎に到着しました。事件はその二日後に起きました。

七日の未明、使臣の一人中官の崔天宗が、咽喉から夥しい流血をして絶命したのです。現場に「魚水」銘の槍の穂先が遺されていたことから、犯人は対馬藩お雇い通詞鈴木伝蔵ということが判明しました。事の発端は日本人の加子(乗組員)と通信使の下官が、長浜町の荷揚げ場で始めた手鏡の紛失を巡る言い争いに端を発し、鈴木伝蔵と崔天宗が口論になったことです。

このとき、崔天宗は皆の前で持っていた杖で、伝蔵を散々打擲(打ちたたく)したというのです。多くの人間で恥をかかされ、名誉を傷つけられた伝蔵は、その夜崔天宗を殺害して逃走したのです。逃走した伝蔵は結局、四月十八日有馬に向かう途中、摂津川州川辺郡小浜村(現在の兵庫県宝塚市小浜町)で捕縛され、五月二日通信使五十四名立会いの下、月正嶋で処刑されました。

この事件に関する史料が、対馬歴史民俗資料館収蔵の宗家文書「毎日記」に遺されており、日朝の精神文化の違いがよく理解できます。それによると、「朝鮮国にては、人を打擲せしめ候ことを尋常と心得、また、打擲に逢い候者はさして恥辱とも為さず、下賤の風習にてこれ有るところより、今度打擲の去外も起こりたるにてこれ有るべく、三使は彼の国の重任候へば義理明察にこれ有るべく候間、鈴木伝蔵打擲に逢い候次第を證人(証人)を取り、分明に申し達し候はは崔天宗犯禁の違ひより事起り候段得心これ有り、日本の風習、踏み、蹴り、或いは唾仕掛け、或いは打擲の恥辱に逢い候時は、決して容赦致さず事に候訳は、信使前訳官へ相達し候。節目

に講定せしめ三使にも存じの前に候。」(読み下し)とみえます。

伝蔵の処刑を見届けるまでは帰らないと、滞留を続けていた通信使一行は、五月八日大坂を出発しました。対馬藩国家老(年寄)は、信使来日の度ごとに日朝双方ともに国法を守り、礼儀を正し、非法な紛争を回避するよう申し合わせをしているのに(訳官使が来島して対馬藩と打ち合わせをする)と、打擲した崔天宗を批難し、隠居した前藩主宗義蕃も朝鮮の動向に配慮しすぎる幕府を批判しています。さつま芋、佐須奈より朝鮮に渡る

この明和の通信使の時現在でも韓国で賞味されている食材さつま芋が、佐須奈から朝鮮に渡りました。「海楼日記」に、「島の中に食べられる草根が有って、甘藷または孝子麻と呼ばれていた。その味は、芋(里芋か)に比べて稍堅くて誠に粘り気があり、焼き栗の味のようなであった。それは生で食べることもできるし、焼いても煮ても食べられる。穀物と混ぜて粥を炊くこともできるし、掻き混ぜて正果(果物や野菜の甘漬け)とすることもできる。或いは餅を作るとか飯に混ぜたりして、可ならざるものは無く、凶年を過ぐす材料として好適のようである。聞けば(栽培は)馬島(対馬)が一番盛んだ」と、その形状・風味・広い有用性・栽培法・保存法を述べ、「どうして我が百姓に大きな助けでないことがあるのか」と、賞賛しています。正使趙職は、佐須奈に着いてすぐこのさつま芋を目にし、手に入れて釜山に送ったのです。皆さんも韓国で、もしさつま芋を目にされたら、「これは対馬から渡って来たのだな」と、お思いになつていいでしょう。これも朝鮮通信使による善隣の交流がもたらした成果といえるでしょう。(さいとつひろゆき・対馬市文化財保護審議会委員)